Japanese Association for Religious Studies

という違いであり一つの罪を指すものであった。さらに罪の概念自体は人間と神・サタンの関係の中で語られていたものだったが、生者と死者（人間同士）にも適用され、「日本人の罪、先祖の罪」という「連帯罪・遺伝罪」が個別にクローズアップされ、教義に反日ナショナリズムが見られるようになっていく。さらに「原理講論」の罪概念においては生理学的な血は関係ないが「血が汚れている。血に恨霊が入り込む」など血と罪の連続性が強調されていく。

ヤチェン修行地におけるカリスマの動向
――中国四川省の宗教政策――

川田　進

ヤチェン修行地（亜青寺）は、一九八五年に四川省甘孜チベット族自治州白玉県に開設された。四川省成都から約七百八十キロメートル離れ、海抜四千二百メートルに位置している。二〇一一年現在、推定で一万五千人を超す修行者と生活者を抱えている。二〇〇〇年以降尼僧の数が急増し、現在全体の約七割を占めている。修行地は僧区・尼僧区・高僧区・商業区・一般居住区・管理事務所（公安局）より構成されており、二〇〇六年以降、一部の区画に電線が引かれた。

主宰者はアチュウ・ラマ（一九二七―二〇一一）、チベット仏教ニンマ派の奥義を究めた成就者である。川田は二〇〇三年から二〇一一年の間に計五回、ヤチェンにて調査を実施した。二〇一一年七月、アチュウ・ラマが圓寂したことにより、ヤチェンは開設以来最も大きな転機を迎えた。本報告の目的は修行地の構造及びアチュウ圓寂後のカリスマ的支配の動向を検討し、中国四川省の宗教政策の特質を明らかにすることである。

ヤチェンに関する先行研究は、日本では川田の論文がある。中国を含む外国ではインターネット上に簡単な紹介はなされているが、学術研究は未確認である。ヤチェンの構造を知る上で重要な研究論文と文献資料を四点示す。

一、『増信妙薬・救護主・成就自在降陽龍朶加参心要略伝』亜青寺発行、二〇〇二年。

二、『三信蓮敷妙月　殊勝化身松阿丹増略伝』亜青寺発行、発行年不明（二〇〇九年頃）。

三、『美佛慧訊』アメリカ仏教協会発行、二〇〇一―二〇〇五年。

四、川田進「ヤチェン修行地の構造と中国共産党の宗教政策」（『大阪工業大学紀要人文社会篇』第五十二巻第二号、二〇〇八年）。

修行地の秩序を形成してきたのはアチュウ・ラマによるカリスマ的支配（ウェーバー）である。アチュウは高僧ロンサル・ニャンポの転生ラマであることから伝統的支配の要素も持ち合わせているが、あくまでもカリスマ的支配が主であり、伝統的支配は従である。カリスマ的支配を形成する要素として、読心術などの「呪術的な力」、ラルン五明仏学院院長ジグメ・プンツォから認定された「瞑想指導力」があげられる。アチュウのカリスマ性を承認しているのはチベット人修行者・在家信徒及び漢人僧尼・在家信徒である。とりわけ多数の漢人が承認して

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

いる事実は、中国におけるチベット仏教の動向を理解する上で重要な鍵と言える。

アチュウの後継者はアソン・リンポチェである。アチュウは十数年の歳月をかけて、権威の一部をアソンに委譲してきた。アチュウ圓寂に伴い、アソンが葬儀委員長を務め、アチュウの遺言を修行者に伝達する役割を担ったことから、ヤチェンの新たな主宰者としてアソンが承認されたと考えられる。また、アソンの後継者として複数の若い転生ラマが育成されている。その中でリンジン・ワンシュが注目を集めている。

中国社会の中でヤチェンの存続が許されている理由を掲げる。寺院ではなく修行地（短期滞在者）という政府の位置づけ（定員制の対象外）、ダライ・ラマ亡命政府との希薄な関係、地元政府との良好な関係、修行地規模拡大による地元への経済効果、社会の安定に宗教の社会貢献が不可欠という中国政府の新たな方針（二〇〇七年）等である。

東シナ海周辺地域の媽姐信仰と日本の聖母信仰

本間　浩

媽祖はもともと中国東南沿岸で信仰された海上安全の一地方神に過ぎなかったが、人々の国内外の移住往来に伴い、海上活動の守護神からより広い意味での全体的な守護神として祀られるようになり、幅広い信仰を獲得するに至った。また、歴代王朝からも冊封を度々受けるようになり、国家に承認された護国の神としても信仰された。今日でも、中国・台湾のみならず、東南アジアをはじめ、世界各地に媽祖廟が見られる。

媽祖は発生当初こそ海上安全、海上守護の神として信仰されていたものの、時代が下るにつれ、海上安全の性格を保持しつつも、妖怪を屈服させる神、賊を防御する神、子を授け、庇護する神など、民間においては様々な利益をもたらす神として、あるいは国家においては後述のようにこれを守護する神として祀られて行ったと考えられる。

東南アジア在住の華人においても、媽祖は基本的には海上安全の守り神として祀られているが、一部では家族の守り神、商売繁盛の神、大漁の神としても祀られており、あるいはイポーなどでは海の平安の神とされている。フィリピンの華人会館にも媽祖神廟、あるいは神堂に媽祖が祀られており、ある天主教の教堂には、洋服を着た媽祖が祀られているそうである。一九五四年には、全世界の天主教の信徒がフィリピンに集まって祈禱会を催した際、ローマ法王が媽祖を天主教の七大聖母の一に封じ、戴冠式を行なったと言う話まである。

東シナ海周辺各地域の媽祖廟は、華僑・華人の海外進出に伴って建立されるようになったと考えられ、それは我が国においても例外ではない。琉球には十五世紀に東シナ海を通って、那覇に華人居留地が出来たのに伴い、上・下の天妃宮が建立され、これが明との朝貢船団あるいは東南アジア各地との貿易の守護神となっていた。

媽祖には「天妃」「天后」あるいは「霊惠夫人」「霊惠妃」など様々な呼び名があるが、とりわけ台湾では「天上聖母」「聖

NII-Electronic Library Service